

子どもの見る目 子どもを見る目

～「第40回日本賞」と「第10回子ども学会議」から～

坂上浩子 (NHK エデュケーショナルこども幼児部 統括部長)

世界から教育的な映像メディアが一堂に会する、「日本賞」教育コンテンツ国際コンクール（2013年10月18日～25日、於：東京・渋谷のNHK放送センター）は、今年度、第40回の記念大会として執り行われました。「日本賞」では「教育」を「個人が自らを成長させる営みをサポートすること」ととらえ、それをたすけるコンテンツを「教育コンテンツ」ととらえています。教育コンテンツには子どもにとっては夢と希望を与え、大人には生涯の学びとなる、という高い目標があります。

今、世界の子どもたちを取り巻くメディアはますます多様になりつつあります。そして通信・科学技術の進展は先進各国や紛争地域だけでなくグローバルに生活や物理環境そのものを、大きく変えようとしています。私は、子どもコンテンツの制作者のひとりですので、教育メディアの現代的傾向をベースに、今年度の子ども学会議（日本こども学会学術集会）で討議された「子どもがひとりの人間として生きる権利」というテーマにおいて、メディアは何ができるのか？——その点を考察したいと思います。

「原っぱ」が子どもの権利を保障する！

現代メディアを語る第一のキーワードは「ユーザー・ジェネレイテッド」。訳せば「ユーザーによる創作&発信」。これは、皆さんがご存知のITの動画投稿にとどまらず、放送分野でも世界規模で進行しています。すなわち、「放送局が発信者、視聴者は受信者」という、これまでのような一方的な関係ではなく、ユーザーや視聴者も発信者となる「制作&発信の相互関係」です。それを教育的視点に置き換えれば、メディア・リテラシー、「メディアを客観的に取捨選択し、生活の中に主体的に取り込んでいく能力、コンテンツ制作を行う能力」ととらえられます。そして、「参加」や「共創」によって自ら主体的に考え行動する、このことは、日本子ども学会設立10周年記念国際シンポジウムのテーマである「子どもの権利と福祉」を考える際の重要な視座にもつながっています。能動的主体としての「子ども」です。

2013年10月12～14日に岡山市で開かれた「日本子ども学会」イベント。国際シンポジウムに先立つ第10回子ども学会議（於：岡山県立大学）の大会テーマは、

「つながるチャイルドサイエンス 遊びと学び」。その基調講演で原島博東大名誉教授が提示されたのは、「少年期の子どもには、親の監督からフリーになって自律的に行動する時間と空間が大切である」ことでした。大人によって意図された「教育」ももちろん大切ですが、それだけでは子どもは成長できない。自由で自律的な空間と仲間が存在すること＝「原っぱ」の必要性です。そこは大人からの治外法権の子どもの王国。「ドラえもん」の世界に限らず、ここでは、子どもたちは自由意志で行動し、発想し、工夫し、共同したり喧嘩したりしながら、失敗や成功体験を得ていきます。それこそが「遊び」であり、同時に教室では得られない「学び」です。

このことは、国際シンポジウムで、ジョージワシントン大学・研究教授のサラ・フリードマン氏が語られたことにもつながります。すなわち、現代社会には「子どものサイエンス」と「子どもの権利」、そして「政策決定と実践に関する科学的知見」この3つの視座が関連しながら必要だということです。さらに、彼女は、人間の発達に生物学的な要素と環境の相互作用であるととらえ、子どもを「周囲の環境を探索する生得的な欲求を持つ存在」ととらえています。そのことから、大人たちの責任として、子どもが自己統制できる環境をいかに用意できるか、コミュニケーションと学習の基盤をつくれるか、そして友情・愛情をはぐくむことを見守れるか（対立解消力を育て得るか）、この3点を重視しています。フリードマンさんは3歳時点での「社会経済階層による発達個人差の大きさ」にも言及されており、ペアレンティングをサポート・育成することの大切さも強調されていました。

以上のことは、メディア制作の視点に立ち返れば、社会の責任として用意すべき環境づくりとして考えられます。コミュニケーションと学びの基盤となり、友情・愛情をはぐくむために、メディア・コンテンツは何ができるのか、「日本賞」教育コンテンツ国際コンクールの受賞作品にはそのヒントがあります。

幼い子どもの目

～心の葛藤を乗り越えるとき～

第10回子ども学会議の1週間後、東京・渋谷のNHKには世界各国の審査委員や参加者が集まり、「第

40回日本賞」が開催されました。

毎年、幼児向けカテゴリーには、短いコンテンツにもかかわらず非常な力強さを持った作品がいくつもエントリーされます。もちろん、知育分野の大作・力作といえるものも多くエントリーされるのですが、近年、多くの制作者が「科学・環境」などと並んで力を注いでいるテーマは、「心」の課題、すなわち「哲学」とも「倫理教育」ともいえる分野です。今回受賞したのも、子どもの心の成長を描いた、なんと6分強のアニメーション作品でした。

私は、この番組の制作者のアニック・ヒルガーさんとは以前から面識があり、子どもの心・視点を的確に捉えて描き出すみずみずしい感受性に敬服していました。とても短いアニメーションでありながら、子どもの心の揺れやときめきを「身体レベル」で思い出させてくれるのです。今回も彼女と話をすると、お子さんを何人も育てている「本人も少年のような」作家とタグを組んでいるのだとか。そこから紡ぎ出された、自伝のような物語。

主人公エルマーは、何が何でも姉をウチに引きとめようと、涙ぐましい努力と失敗を繰り返します。全て失敗するのですが、その落胆や喪失感は見ている私たちに切々と伝わって来ます。だからこそ、その後の大転換、エルマーの変身が鮮やかです。「自転車に乗れた！」彼は妹の自転車稽古を颯爽とサポートするので。「ぼくが、お兄ちゃんだ！」誇らしい声が聞こえてきそうです。

審査講評にも述べられていることですが、子どもに向けてコンテンツをつくる時最も大切なことは、「子どもを人間として尊重しているか」ということだと思います。大人が想像もできないような重大な悩みや葛藤をもち、それに対していろいろな考えをめぐらせな

がら、今を生きている存在としての子ども。その視点に立つならば、子どもは、もはや庇護されるだけの受け身の存在ではなく、自ら決めたことに執着したり、勝手に動機で喜怒哀楽したり、奇想天外なアイデアを実行したりする、固有の人間なのです。

このように子どもを「ひとりの人間臭い存在」として描くとき、視聴者の子どもに「他人事として」ではなく「自分のこと」として如何に受け入れられるか、ここが制作者にとっては難しいところだと思います。というのも、特に幼児向けコンテンツが大人向けのものと違うところは、子どもは「ために」見ない、ということです。自分の成長の糧になるからとか、社会で流行っているからとかの「ために」は見ない。おもしろくなくては見たくないというところが、「幼児が一番厳しい観客」と言われる所以です。その点、制作者ヒルガーさんの作品の卓越したところは、ユーモアが身体レベルで沸き立つ、つまり、いかに深く難しいテーマをあつかっても「常に楽しいこと、ワクワクすることを追い求めている子どもの視点や発想」から離れないことなのです。それとともに、彼女は問いかけています。「子どもって何を考えているのだろう？」「子どもの目にはどのように見えているのだろう？」「子どもはどんな行動に出るだろう？」と。たとえば、「自分が重い病気になったとき」、たとえば「両親が喧嘩したとき」…。だからこそ、彼女の作品は子どもたちに支持され、親からも、自信と勇気を与えると好評なのだと思います。

「子どもの目ももち続けること」は、子どもコンテンツ制作者が直面する本当に困難な「壁」で、この壁を乗り越える努力を続けられることが、放送番組の世界に限らず、必須の能力なのではないでしょうか。すなわち、知識の固定観念を剥ぎ取って、感性を働かせ続け、ドキドキやワクワクを忘れないこと。幼児コンテ



幼児向けカテゴリー最優秀作品

機関：第2ドイツテレビ（ZDF）

時間：6分20秒

メディア：テレビ番組

タイトル：きょうからは、おにいちゃん
(Sevenstone: Nearest and dearest)

(内容)

主人公の少年エルマーはお姉ちゃんが大好き。水泳やとんぼ返りや寄り目の仕方など、「エルマーにとって大切なこと」をなんでも教えてくれる、大切な存在だ。今も自転車の乗り方を教えてくれている。そんなある日、(彼にとっては突然！)お姉ちゃんが大学に行くためにうちを離れることになった。なんとか姉を引き止めたいと考えたエルマーは、小さな妹の思いつきから、ビックリさせて「姉の時間を止める」ことを実行に移す、が……。姉の出発を見送ったエルマーは失意の中で、「自分が小さな妹の兄である」ことに気付く。

(審査講評)

この6分間の素敵な物語から、非常に強い感覚と感情が伝わってきます。主人公の少年エルマーは、家を離れる姉カーラの旅立ちに深く動揺します。しかし姉が家からいなくなり、自分が「兄」になって妹のミリの面倒をみる責任があるという自覚が生まれると、人生が変わっていくのです。この繊細な色彩の個性あふれるアニメーションは、子どもの視点をとても尊重しています。世界に共通する言葉、すなわちアニメーションという表現手法をつかって、子どもたちが自分を重ねてみたくなる前向きな人物像を描き出しており、感動的で親近感のあるストーリーによって、幼い少年の気持ちと心の成長を描き出しています。

ソツは世界の共通言語という理由がここに 있습니다。

どんな個性の成長をも保証する教育とは？ ～ひとりの人間としての子どもを考える～

幼い子どもに向けたものではなく、子どもを考えるものについても、特筆したいと思います。福祉部門の最優秀賞となった作品カナダ国立映画制作庁制作の映画「星の子アルフェ」はひとりひとり違う能力や個性を持った子どもの教育・子育てのあり方を考えさせる類い稀な美しい映画作品です。

「なんと美しい映像なのだろう。なんとアルフェは魅力的で、なんと両親は我慢強いのだろう…」それが私の率直な感想でした。82分という長く淡々とした作品ながら視聴者を惹きつけ止まないのは、スイスの煌めく山々や森、草原を舞台に、伸びやかに自然と呼応するアルフェの魅力です。それを可能にしているのは、何か？ アルフェを心から愛おしく思い、彼女の成長について悩み、一部始終を撮影している父親の視点が私たちに「親や学校や社会はどうあったらよいのだろう？」という問いを真摯に突きつけてくるのです。やがて、その問いへの惑いは、アルフェの姿や言葉によって「固定観念を超えて」解きほぐされてきます。「私たち人間はあるがままになんと美しいのだろう」と。「あるがままのアルフェの在り方」を受け入れた結果、彼女の固有のペースで成長する姿が私たちに感動をもたらします。そして、そんなアルフェの姿を軸にして、時にいじめたり、寄り添ったりする幼い友だちや、根気強くアルフェの教育に当たる教師と両親が交響曲のようにハーモニーを奏でていきます。

当初、私は自然映像のインサートが多いのは、時間

経過を表し、視聴者を飽きさせないため、と通常番組の感覚で考えました。が、そうでなかったのです。美しい自然映像は「アルフェの見ている(感じている)」と、撮影者である父親自身が「発見した」世界だったのです。

制作機関であるカナダ国立映画制作庁は、毎年珠玉のアニメーションや番組をエントリーし受賞している福祉部門の世界のトップランナーです。この作品に添えられた「教育意図」には、以下のようにありました。

- 全ての人は違うことの価値を共感し、我慢強く見つけ、対話を生み出す
- 通常の学校においても、統合教育の意味について議論する
- 身体、神経的に個性的な子どもをもち悩む両親の識見を育てる
- 教育関係者にとって、まれな遺伝疾患を持った子どもと一緒に教育するツールとする
- ケアを行う人々にとって「子どもへのラブレター」となる

障害や病気など困難な状況を抱えた人々を描くとき、私たちははともすると優しい傍観者のステレオタイプになったり、逆に、主観を締め出そうと努力したりしがちになります。一方、欧米の制作者はスタンスを明らかにし、「偏り」批判を恐れず、自分の考えを明確に打ち出すことが多いようです。統合教育についても、様々な教育的議論や現実論があるなかで、最も大切なものは何か、この作品は気付かせてくれました。実は人間は「基準(ルール)」からフリーな存在として生まれながら、「基準」のなかに生きようになるということです。「基準」はア prioriにあるものではないのに、そして、「ものさし」はひとつではない



Alphée des étoiles
Réalisé par Hugo Latulippe
Produit par Eric De Gheldere (Esperamos
Films), Colette Louméde (CNF)
© 2012 Esperamos Films. Tous droits
réservés.

福祉教育カテゴリ

機関：カナダ国立映画制作庁

時間：82分

メディア：テレビ番組

タイトル：「星の子アルフェ」

(Alphée of the stars)

(内容)

まれな遺伝疾患をもった5歳のアルフェの成長と、彼女の教育を案じ、統合教育を求める両親の思いをスイスの自然の中で描き出す。彼らの選択によってカナダを離れ、スイスの山間部の統合教育の保育園に入るアルフェ。他の健常な子どもたちと触れ合わせたいという思いを強く持ち、言葉の教育をはじめとして懸命に成長を促そうと努力する父親。対照的に、アルフェ自身の自由闊達な視線・言葉・友だちや兄とともに行動する姿は、大人の「健常な成長」の固定観念を越えて生き生きと描かれる。(審査講評)

この映画は、まれな遺伝性疾患をもつアルフェをめぐる作品です。映画制作者の父親は、アルフェの視点から、彼女のまわりの世界をきめ細やかに記録していきます。その結果、信じられないほど美しく、感動的な映画が生まれました。何が彼女にとって最善なのか、映画はアルフェの両親が向き合う選択を描いていきます。映画はまた、思いやりのある教育制度が、いかに特定の子どもだけでなく、彼女と関わりあう、まわりのいわゆる「健常な」子どもたちをも変容させることができるかを示してくれます。映画には特別な資質も染み込んでいます。幼いアルフェが驚くほど前向きで喜びにあふれているからです。しかし、このような美質を映像にとらえるのは、決してたやすいことではありません。だからこそ、この映画制作者は高く評価されるにふさわしいのです。

のに、これしかないと思込んでいる。そのことに気付き、どんな選択肢を用意できるのかを議論することが、成熟した社会なのではないでしょうか？そのため、インターネットも含めて、カナダでは視聴者に参加させており、この作品には、学生たち若い世代からも多くの反響があったといいます。若い世代の「親教育」はカナダの社会的テーマであり、最も世界で進んでいる国のひとつとも言われます。学ぶべきところは大きいと感じました。

メディア・コンテンツが個々の作品の視聴にとどまらず、議論や発信のきっかけになっていく。「子どもの権利と福祉」の実現の視点で見ると、ここが大切なポイントであり、上記ふたつの作品の価値にも通じています。エルマーが葛藤を乗り越えることができたのは、姉・妹との「密接な人間関係」がそこにあるからです。そして、遺伝的疾患を持ったアルフェが感動を呼ぶのは、子どもが自律的に自己表現できる環境と友だちを用意しようとする親や教師たちの懸命な努力と、それを超越する子どもの自然の力を私たちも目の当たりにするからです。メディア・コンテンツが、「子どもの権利と福祉」に資することにおいて社会的な意味をもつ、その可能性を堂々と主張していると言って過言ではないと考えます。では、日本において、私たち自身はどのように取り組んでいるのでしょうか？

子どもコンテンツ制作の永遠の問い ～その答えは子どもに学ぶ～

子ども学会議でも発表したことですが、私たちは日ごろから、制作者として、子どもの成長や発育、子育て支援に資するコンテンツを模索しています。「メディアの変革期において、コミュニケーションと学習の基盤をつくるために何ができるか？」——私は、その答えは、「見て終わりではないコンテンツをつくれるかどうか」であると考えています。「学び」が一方的な知識の注入ではなく、思わず身をのり出させるものであるかどうか、つまり、子どもたちの主体的・能動的な姿勢や行動に繋がるコンテンツをつくることができるかどうかということです。

たとえば、2003年に発足したNHKのEテレの番組「にほんごであそぼ」。私たちは「子どもと日本語の付き合い方に関し、どんな良いきっかけを用意できるだろうか？」と、真剣に討議を重ねました。その結果、伝統的な日本語が大人の間でも消えつつあるなかで、名言・名句・ことわざなど子どもたちに伝えたい日本語を、身体的表現で紹介する番組が生まれたのです。そこでは、いかに言葉を「遊び」に発展できるか、子どもたちがやってみたくなるか、がポイントとしてク



NHK Eテレ
「にほんごであそぼ」
(月～金) 8:40～8:50

※「日本賞」とは？

1965年に、教育番組国際コンクールとしてNHKが創設しました。以来、「世界の教育番組の向上と国際的な理解・協力の増進」という目的を掲げ、教育番組の発展に寄ってきました。その創設の目的を継承しつつ、2008年には、インターネットの普及や教育現場の変化に対応し、審査対象をテレビ番組から、リニアコンテンツ（テレビ、ビデオ、映画など）、ウェブサイト、教育ゲーム、その他双方向コンテンツへと大きく広がっています。

リアーになりました。そして放送した結果、スタート当初から、視聴者の子どもたちは「寿限無」などの日本語の面白さを自分でつかみとり、大人より早く覚えて口ずさむだけでなく、自分でオリジナルの「寿限無あそび」などを作り出すまでになったのです。ある子は大縄跳びを遊び歌にしてみたり、ある子はフラフープをやりながら唱えたり。力のある素材を、適切な表現手法をきちんと選んで提示すれば、子どもたちの能動的な遊びを生み出すことができる、そして、人と分かち合ってくれる、それを教えてくれたのは、子どもたち自身なのです。この10年、投稿「寿限無」は「にほんごであそぼ」の定番コーナーとなりました。

「子どもの権利」と書くと、「法律」や「政策」の世界の議題のように思われ、日々の私たちの生活実感から離れがちになります。しかし、子どもが「自らが愛され尊重されていると実感できる人的・物的環境」「自信をもって行動してよいというモデル」「試行錯誤のできる時間と空間」——それらは日々の生活の積み重ねの中でこそ実現されるべきものではないでしょうか？ その積み重ねの中で、子どもたちの小さな発見や喜びを育てることがメディア制作において、いかに大切なことであるか。「子どもの見る目」に学びながら、私も自分の中にその目をもつ努力を怠ってはならない、出発点に立ち戻って考え続けたいと思います。

〈筆者プロフィール〉

坂上浩子（さかうえひろこ）

1958年生まれ。80年NHK入局。学校放送番組、NHK大阪局、教育番組センターなどを経て現在に至る。担当した番組は「いちにのさんすう」、「いってみようやってみよう」のほか、育児番組や青年向けドキュメンタリー等。1999年より「ピタゴラスイッチ」「いないいないばあっ！」等の幼児番組プロデューサー。2009年より「日本賞」教育コンテンツ国際コンクール事務局長を務める。2013年6月より現職。